

福岡大学 医学会ニュース

No. 52

福岡大学医学会 福岡大学医学部内

学部長就任の挨拶



福岡大学医学部長

岩崎 宏

私は昨年十二月に満留前医学部長の跡を継ぎ、医学部長を拝命しました。本年は福岡大学医学部の卒業生が三〇〇〇人の大台を突破したという、記念すべき年です。すでに多くの卒業生が全国各地で優秀な医師として活躍しており、あるいは大学の教授や助教として優れた研究成果をあげておられる学究も少なくありません。昭和四十七年に創立され、三十四年の歴史を刻んできた我々の医学部にあって、新設医大と称された時代は過去のものとなりつつあります。人間と言えども、若返り、教育、診療、研究の体制が一新されようとしています。また長年の念願であった福岡大学病院の新診療棟の着工が確定し、これが完成すれば診療体制の飛躍的なレベルアップが期待されます。そして病院の診療体制の充実にマシし、医学部における研究の高度

化を促進するために、講座制の改善と再編が計画されています。現在の外科学第一、外科学第二および心臓血管外科学を一つの講座としてまとめ、その中で臓器別に再編し、消化器、呼吸器、心臓血管を三つの柱とするように、乳腺や内分泌などの臓器にも対応できるように再編成するという方針が医学部正教授会で決定され、平成十九年四月には新しい外科学教室が生まれることになりました。特に消化器分野は範囲が広く、疾患の種類も多く、患者さんの数も多いため、最も重要な臓器になると思われ、このほかの内科および外科の部門についても、時代のニーズに必要に応じて再編を推進する必要があると考えております。

また先日の理事会では、福岡大学筑紫病院の隣接地の購入が承認されました。現在の筑紫病院は病院としての規模が小さい上に、設備が老朽化しており、それらの改善が緊急の課題となつていますが、今回の土地購入により、将来の増設に向けて大きな足がかりができました。これらの改善によって病院の機能が一層充実し、「高度な先進医療を提供する包括的医療センター」として発展することが期待されています。

さらに来年度は医学部看護学科の開設が予定されており、現在文部科学省への申請作業が進んでいます。本年一月二十三日には看護学科棟の地鎮祭が執り行われ、来年一月竣工をめざしてまいります。新設の看護学科も優秀な看護師が巣立つ日もそれほど遠くはあられません。本看護学科は医療の高度化に対応できる資質の高い看護師の育成をめざしていますが、同時に少子・高齢化の社会構造の変化に即して、在宅医療や訪問看護など患者中心の、より健康な生活を支える実践的看護能力も重視しています。現在の福岡大学附属看護専門学校は、昭和五十年の開設以来、豊かな人間性と看護の専門職業人としての必要な知識、技術および態度を備えた、看護の実践者を育成することを目的として、多数の優れた看護師を輩出していますが、この素晴らしい伝統に基づいて、新たな医学部看護学科が誕生しようとしています。

しかしながら、問題点も多く残されています。医学部では過去数年間いろいろな教育改革に取り組み、モデル・コア・カリキュラムに基づく医学教育プログラム、ユニットリアル教育、臓器別ユニット講義、客観的臨床能力試験(OSCE)、クリニカルクラッシュなどを次々に導入し、医学教育の改善をめざしました。しかし、学生諸君の学力は期待されたほどには向上せず、CBT全国共用試験および医師国家試験の成績も決して満足できるものではありません。教育システムの外形は整備されましたが、教育の内容と学生諸君のやる気がマッチしなかったことが不振の原因と考えられます。現在教授会としても、種々の対策を考えていますが、福岡大学の実情に即した教育体制を早急に組立て直し、学生諸君にやる気を起こさせる必要があり、四年生までの基礎学力を充実させることが非常に重要であり、これについてはじめて五、六年生の臨床教育が向上する期待されますが、全教職員と学生諸君が一体となって教育改革に取り組む必要があります。

医学部に活力を与えるためには、教育・診療の発展を図るとともに、研究体制を充実する必要があります。医学部の研究設備としては、総合研究室(総研)がありますが、優れた研究成果をあげられるように機能を整備し、効率的に運用したいと思っております。総研システムの改善は大学院の改組とも協力して行う必要があります。最近大学院の入学者が減少していますので、社会人入学や夜間コースなどを導入して、大学院を魅力あるものとして活性化することが望まれています。またアニマルセンター、分子腫瘍学センター、RIセンターなども時代の要求に応えられるように、総研と有機的に連携して運用する必要があります。

これらの目標を達成し、医学部・病院をさらに発展させるためにはどのようにすればよいか、皆様とともに考えていきたいと存じますので、一層のご支援とご協力をお願いいたします。

福岡大学病院長に就任して



福岡大学病院長

瓦林 達比古

福岡大学病院は昭和四十八年八月開設以来三十二年に及ぶ歴史をもち、初代樋口謙太郎院長から数えて第九代目ということになりました。当時は新設医学部の走りであり、病院の建物は新しく構造自体も東西南北にのびるユニークなものでしたが、もはや三十年を超えてしまつては建物全体の老朽化が進み、何かと手を入れなければならないような状態になってしまいました。そこで数年前から外来部門を中心とする新診療棟構想を検討してまいりましたが、ようやく昨年末に学校法人の承認を得ましたので、平成十九年秋の着工に向けて具体的に設計を開始する段階となりました。これからの作業が大変だとは思いますが、新しいものを作り上げる楽しさがありますので、地域に開かれたぬくもりのある家庭的な病院を目指して全職員一丸となつて計画を進め

て行きたいと考えております。ところで我が国では未だ出生数減少に歯止めがかからず、年間出生数が昨年は一一〇万人を割つて一〇六万人にまで落ち込んでいますが、一方で年間出生数が二七〇万人程度もあつたいわゆる団塊の世代(昭和二十二年〜二十四年生まれ)の高齢化が進んでいます。この少子高齢化の人口構造変化を受けて、我が国の社会保障給付費、とりわけ医療給付費は、今後とも経済の伸びを大きく上回つて増大する見込みです。このままでは保険料負担や税負担といった国民の負担を継続的かつ大幅に増加させることが必要となり、社会保障制度自体の維持が困難になつてくることは想像に難くありません。したがって、現在、政府主導で進められている医療制度改革は年々厳しさを増すものと思われ、この中で公的医療保険がカバーする医療給付範囲の見直しや、世代間の負担の公平化など急増する高齢者に対する直接的な負担増と共に、特に地域を重視した安心・安全で質の高い効率的な保健医療提供体制の充実が求められるようになり、具体的には、レセプト・カルテなどのIT化促進、評価機能の強化、情報開示の充実、長期入院の解消、開示の機能の分化、連携の推進などが考えられます。私たちはそれらへの取り組みをさらに加速させていく所存です。特に平成十六年五月から本格的に

活動を始めました地域医療連携室を介した病・病および病・診連携ネットワークの拡充が重要であり、現在まで福岡大学病院を中心とした福岡市西・南部および糸島地区の地域医療連携協議会(FDNET協議会)で、この数年に亘つて勉強してきた地域完結型医療を実践する中で、特定機能病院としての地域社会における本院の役割を十分に果たせようという努力を続けてまいりたいと思っております。以下に具体的な事業目標をご紹介いたしますので、皆様の末永いご指導・ご鞭撻をあらためてお願い申し上げます。

平成十八、十九年度事業目標

- 一、新診療棟の本設計と着工
- 二、地域完結型医療ネットワーク構築のさらなる推進
- 三、高度先進医療および先進医療の推進
- 四、少子高齢化の社会構造変化を見据えた診療体制の整備
- 五、血液浄化療法センター(腎センター)移転拡充計画
- 六、PET-CT導入計画
- 七、卒前・卒後臨床教育および臨床研究体制の強化
- 八、福岡大学全職員および有信生サービスの向上

今後二十年以上続くことが予測される少子高齢化社会への福岡大学病院の対応を、地域の問題として積極的に検討してまいります。周産期および小児医療を充実させ、脳卒中や心臓病に代表する学術的・臨床的センターならびに薬学部やスポーツ科学部とタイアップした予防医学や東洋医学の導入を積極的に進めます。

現在進めている地域医療連携室による前方・後方支援ネットワークをさらに広げ、この活用により本院の外来・入院患者比率を適正に維持し、福岡市西・南部・糸島地区の地域完結型医療提供体制を指導的に整備していく予定です。

特定機能病院の特長である臓器移植や特殊医療技術などの高度先進医療を、円滑に提供できるような環境整備を図らなければならないと考えております。

今日、悪性腫瘍の診断は新しい診療機器の登場により飛躍的に向上していますが、当院にもPET-CTを導入して癌の早期発見などの診断精度を高めます。また、今後の高齢者検診人口の増加にも対応したいと考えております。

このような事業目標を実現させるために、今回一名の副病院長に加えて四名の病院長補佐を新設して執行部体制を強化致しました。医学部を始めとする本学の他学部や病院内のあるゆる部署との連携を密にして、コミュニケーションとエグゼクティブをキーワードに病院全体の運営を考えていく所存です。



からも多数の方が紹介されています。消化器疾患はありふれたものですが、その診療の進歩は早いものです。内視鏡技術も著しく進歩しています。北部九州の拠点病院を目指してわれわれの科は絶え間なく進歩することと思われまます。地元医師会との相互の信頼関係に基づく連携体制を築きあげることが最重課題において診療を行っています。



整形外科助教授
柴田 陽三

内藤正俊教授の御推挙を受け、二〇〇五年十月一日付けで整形外科教室の助教授を拝命致しました。私は福岡大学医学部一九七五年入学の四回生で、大学時代はゴルフ部と写真部に所属していました。一九八一年に卒業し、整形外科教室に入局致し、一年目は大で、二年目は国家公務員共済組合会浜の町病院で研修し、大学院に進みました。肩関節の各種疾患における動態関節内圧の研究で学位を取得致しました。本研究を第三回国際肩関節学会において発表を行ったところ、英国(Sir Prof. Watson)の目にま

「Surgical Disorder of the Shoulder: Churchill Livingstone」の分担執筆をさせて頂く栄誉にあずかり、よき思い出となっております。その後の二年半、三池郡高田町のヨコクラ病院や白十字病院の整形外科部長を経て、一九八九年十月より福岡大学病院整形外科助手として戻り、一九九三年講師に就任し、この度の昇格に至りました。院外研修中は一般整形外科の臨床研修を行い、

大学に戻ってからは一貫して肩関節外科における臨床と研究に専念致しております。臨床面では手術侵襲を軽減し、在院日数を短縮させるために積極的に関節鏡視下手術に取り組み、直視下手術時代は平均四週であった入院期間を、鏡視下手術導入後、十日まで短縮しています。研究では外因性のヒアルロン酸Na注入が、腱板断裂の保存療法として有効であることを証明し、その理由として、内因性のヒアルロン酸の構成要素であるコンドロイチン6硫酸と4硫酸が増加し、外因性ヒアルロン酸が単なる潤滑剤ではなく、関節内の恒常性を回復させる事を証明致しました。また、肩関節唇損傷の修復術治療成績を向上させるために、解剖学的宮内教授のご厚意により、系統解剖体を用いて手術手技の指標を作成致しました。本指標により、大学野球の投手を復帰させることができるようになり、一九九六年には日本・欧州肩関節学会のtravelling fellowとして七カ国十施設を訪問し、活発なディスカッションを通じて欧州の肩関節外科医と親交を深めることができました。今後とも臨床、研究、学生教育に邁進し、微力ながら福岡大学医学部の発展に寄与できるように頑張りたいと存じます。今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。



第53回 福岡大学医学会例会〔報告〕

日時/平成18年3月1日(水) 17:00~18:30
場所/医学部臨床大講堂

〔進行〕 集會幹事 岩本 隆宏

- I. 開会の辞 集會幹事 岩本 隆宏
- II. 会長挨拶 医学部長 岩崎 宏 先生
- III. 講演 座長……岩崎 宏 先生
 - 講演1 立花 克郎 先生 (解剖学教授)
「超音波治療の現状と未来」
 - 講演2 井上 隆司 先生 (生理学教授)
「血管機能を制御する新しいCaチャンネル群TRP蛋白質」
 - 講演3 内尾 英一 先生 (眼科学教授)
「角膜移植とそれをとりまく課題」
- IV. 福岡大学医学紀要第32巻優秀論文賞授与式
受賞者 平川 清人 先生 (精神医学)
森 聡子 先生 (総合周産期母子医療センター)
- V. 受賞論文の要旨講演
 - 講演1 講演者…平川 清人 先生 座長…西村 良二 先生
不登校を主訴とし精神科クリニックの外來を受診した児童、思春期患者の臨床的特徴
 - 講演2 講演者…森 聡子 先生 座長…満留 昭久 先生
福岡大学病院総合周産期母子医療センター新生児部門における超低出生体重児の短期予後 (1991年~2000年)
- VI. 閉会の辞 集會幹事 岩本 隆宏



優秀論文賞受賞者を囲んで (左から、岩本先生、岩崎医学部長、森 聡子先生、平川清人先生、西村教授、満留教授)

学位取得

次の3名の方は、平成17年10月4日付けで福岡大学より医学博士を授与されました。

論文提出による学位取得者

- 田中 景子 (公衆衛生学助手)
Active and Passive Smoking and Tooth Loss in Japanese Women : Baseline Date from the Osaka Maternal and Child Health Study
- 中山 吉福 (病理学助手)
Intraductal Tubular Adenoma of the Pancreas, Pyloric Gland Type: A Clinicopathologic and Immunohistochemical Study of 6 Cases
- 村井 映 (救命救急センター助手)
Comparison study between the mechanisms of allergic asthma amelioration by a cysteinyl-leuko-triene type 1 receptor antagonist, montelukast, and methylprednisolone

脳神経外科学講師 大城 真也



昭和六十三年(一九八八年)福岡大学医学部を卒業後に脳神経外科へ入局し、早いもので十七年の歳月が過ぎました。入局後二年間の臨床研修を終了し、その後福岡大学を初めとして関連施設での部外研修にも従事し、今回約五年ぶりに大学病院へ戻ってきました。その間、平成三年からは大学院へ進学し、悪性脳腫瘍に対する腫瘍壊死因子(TNF)の抗腫瘍効果に関する基礎的実験にて学位を得ました。その後は臨床活動を継続しながら平成八年からは米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)で約一年 Research Fellowとして悪性脳腫瘍の基礎実験に携わってきました。帰国後もさらなる臨床研修の技量向上および学術/研究活動に努めながら現在に至っています。

循環器科講師 西川 宏明



今回、平成十七年十月からは福岡武雄教授の下、「患者さんのための医療」を中心に学術/教育活動に従事しています。医療情勢の厳しい折、「医療の原点」を見失うことのない臨床活動を見守っていただきたいと思います。

山口県下関市出身で、一九九五年(十八回生)に福岡大学医学部を卒業しました。父親は消化器内科で開業し、

ておりましたが、学生時代より非常に心疾患に興味があったため福岡大学第二内科に入局しました。自慢出来る経歴は無く、白井和之先生(現当科講師)心カテ主任の説く「家庭よりカテ」の教えの下、ひたすら臨床一筋に病棟を駆け回り、心臓カテテル治療に没頭し今日に至っております。経皮的冠動脈形成術(PTCA)は患者に対する侵襲が低く、入院期間も短く、社会復帰が早く出来ることにより世界中が注目し目覚ましい勢いで普及してきました。しかし、その歴史は浅く一九七七年にスイス人のAndreas Gruentzigが人体で初めてPTCAを施行し、ステントが冠動脈に應用されたのは一九八七年のことです。これらの治療法の開発により虚血性心臓病の予後は大きく改善しましたが、PTCA後の再狭窄、血栓閉塞、抗血小板療法の問題などの大きな問題が発生しました。二〇〇四年八



第32回 医学部慰霊祭

第三十二回福岡大学医学部解剖体慰霊祭は、ご遺族並びにご来賓の方々、本学教職員と学生約二百五十名が参列し、平成十七年十月十五日(土)午後二時から福岡斎場において厳粛に執り行われました。今回祀られた霊位は、学生の医学教育の目的で、正常解剖のために献体された三十二柱、病院で死去されて病因究明のために病理解剖を御承諾頂いた八十一柱、合わせて一三三柱でした。

献灯献花の後、厳粛な雰囲気につつまれて慰霊祭は進行し、満留昭久医学部長は祭詞の中で、医学の発展のために欠くことのできない解剖にご献体頂いた霊位とその遺族、さらに、ご協力を頂いた

各種関係機関に敬意と謝意を表すと同時に「私どもは、思い起こして、今後益々、勉学、研究に励み、人類の幸福と福祉に貢献できますよう努力することを誓います」と新たなここに一堂に会し、皆様方



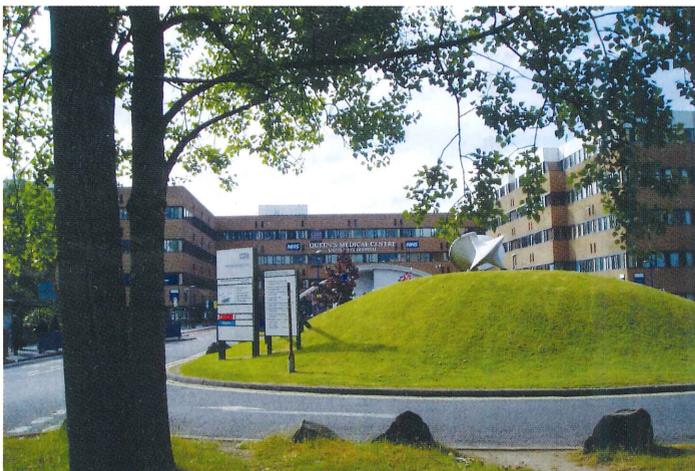
海外だより

英国の中年内視鏡医より

Nottingham大学
Wolfson Digestive Disease Centre
筑紫病院消化器科講師 八尾 建史

福岡大学医学部のみなさん、こんにちは。小生は筑紫病院消化器科から一年間の予定で在外研究員として英国のNottingham大学病院に滞在中である中年内視鏡医です。仕事の内容は、主に消化器内視鏡の指導と分野における共同研究です。小生の所属はNottingham大学病院のWolfson Digestive Disease Centreという消化器病センターであります。

Nottinghamはロンドンから北へ列車で二時間ほどに位置する英国の典型的な中小都市で、ロンドンと異なり日本人はほとんど住んでいません。Nottingham自体は、ロビンフッドで有名である以外はこれといって特徴のない英国の町であります。Nottingham大学は英国では有数の大学であり、ランキングはトップ七に入っている総合大学であり、敷地も規模ももちろん福岡大学と同じぐらいだと思います。英国は、ヨーロッパ諸国のなかでも医学のレベルが高く、英語圏ということもあり、ヨーロッパのみならず、中東、アジア、アフリカ、アメリカ大陸など世界中から医師が集まって、臨床と研究を行っています。日本人医師はなかなか海外で臨床医として経験を積む機会がありませんが、このような国際的な雰囲気の中で医療に携わる機会を得ただけでも大変貴重であると思っています。なによりも自由に開業に各国の医療事情など若し先生達と討論できるのは大変興味深い点であります。



Nottingham University Hospital。別名Queen's Medical Centre。英国の保険機関NHSが運営する病院の中では英国最大規模1200床を有する総合病院である。あまりに広すぎて病院内で道に迷っている患者さんを毎日見かける。

渡英当初、私はinternational person here』と指摘され、日本はそういえば極東の島国であり、小生が最も遠いところから来ている唯一の日本人医師であるのだと実感しました。それはともかく、小生の日常はほぼ毎日消化器内視鏡技術をこのスタッフの先生に指導し、臨床のカンファレンスや内科、外科、病理合同のカンファレンスに出席しなるべく積極的にコメントをするようにしています。日本と異なり出席している医師のすべてが討論好きで、上下など関係なく学術の場でも患者さんの治療方針を決める時でも若し先生が積極的に発言しているのが印象的です。

疾患の内容も日本とは異なり、胃癌は少なく、上部消化管の腫瘍では食道のBarrett上皮由来の腺癌が最も問題視されています。小生の渡英した目的の一つに、早期胃癌で確立した新しい内視鏡診断法を英国において別のBarrett上皮由来の早期癌の応用できるかということがありましたが、幸い多数例を実際に自分で検査させてもらい同じ内視鏡技術が別の国の別の臓器の早期癌にも応用できることが最近判明し、現在新しい知見として小生のグループで論文を執筆中であり、食道のBarrett上皮に発生する



Wolfson Digestive Disease Centreのスタッフ、中央が筆者、カンファレンス室で撮影。さまざまな国出身の医師から成り、みんなフレンドリーであり和気あいあいとした雰囲気である。日本人医師は病院内では小生のみである。このみんなは日本人が英語が得意でないということさえ知らない。トヨタになっているが日本人については誰も何も知らない。

腺癌の早期発見は世界でも最も注目されている命題であり、今回の訪問の大きな学術的成果の一つと思います。英国は日本と同じ小さな島国であり、小生の存在もいい意味で話の種になっており、多くの医師と学術的意見を交わす機会を得ることができました。大学間、大学内の学術交流も盛んであります。また近隣のヨーロッパ諸国も近く、ヨーロッパ内での交流も容易であります。実際他の大学の先生がNottingham大学を訪問しデスカッションする機会も多く、また小生自身もCambridge大学やMunich Universityをはじめとするいくつかの大学から講演に招待され、英国内外の学術的交流に貢献できるといふ、研究者としては無二の喜びを感じています。

実際の生活や仕事では、当たり前ですが、語学力がどれだけあるかということが、公私ともにハッピーに過ごせる最も重要な鍵であります。英国は英語発祥の地ですが、きれいなBritish Englishを話しているのは、ほんの一握りの人々であり、英国人や移民、同じ民族でも地域、階層や年齢によりしゃべる英語やなまりが異なり、英語やコミュニケーションの難しさは、ほんの少しの困難であることが分かりました。実際、小生は英国の臨床医の資格をとるために英国の英語の試験を受け、日本人医師にしては比較的高得点をとりましたが、実際の仕事や生活では語学の点でかなり苦労しました。もちろん異なる文化や価値観の違い、治安が悪いことにより英国の社会生活になれるには大変なエネルギーが必要でしたが、最

も重要なのはやはり語学力だと思います。小生はいわゆる中年の域に達してはいるので、もつと適応力の高い若い先生であれば、逆に言うところ語学力さえあれば、英語圏で臨床医として活躍することは可能であると思えます。英国の臨床では、エビデンスの無い診療がままに認められず、臨床研究ではちよつとしたことでもエビデンスレベルの高いブロットコルを作成し実行し学術研究としてあつという間に発表してしまうやり方、また治験や実験的臨床研究でも90%以上の患者さんが同意してくれる姿勢は、日本人と違う英国人の優れたところであり学ぶべきポイントが多いと感じています。これらのことは、数日間訪問しただけでは決して分からないことであり、実際に現場でも仕事を始めて初め体験することです。

中年にして英国で臨床の場で臨床と研究を行う機会に恵まれ大変感謝しています。特に、在外研究員の機会を与えて頂いた福岡大学、推薦頂いた八尾恒良前教授、松井敏幸現教授、小生の抜けた穴を埋めて頂いている沢山の筑紫病院の先生方、スタッフ、医局の秘書さんにこの場を借りて深くお礼を申し上げたいと思います。そして若い先生方が英語さえできれば臨床のフィールドでも世界へ飛躍できるた

くさんのチャンスに恵まれますが、報告とさせて頂きたいと思えます。みなさんに再びお会いできる日を楽しみにしています。



Nottinghamの唯一の観光名所であるNottingham Castleの庭。むかしロビンフッドがこの城に攻め入ったという史実で有名。ガーデニングが第一の趣味である英国人にかかれば、庭木もロビンフッドに化身してしまう。

形成外科は一九九〇年(平成二年)に福岡大学整形形成外科教室内に設置された形成外科診療班が母体となり、一九九六年、福岡大学病院に診療科が新設されました。二〇〇五年十月には大慈弥裕之が初代教授に就任しました。二〇〇六年一月現在、医局員の総数は、二十一名で、うち十名が昨年度までに(社)日本形成外科学会認定専門医を取得しました。医局員は学内に十一名(教育職員五名、医員四名、大学院生二名)、学外に十名(関連病院八名、他科研修二名)となっています。今年も三名(本学一名、他学二名)が新入局を希望しています。福岡大学病院形成外科の昨年(二〇〇五年)の手術件数は

七二四件(入院六〇〇件、外来一二四件)でした。当大学形成外科の診療、研究の主な柱は、一、創傷管理 (Wound Management)、二、小児形成外科、三、再建外科、四、抗加齢医療 (美容外科)の四つです。創傷管理では顔面外傷や熱傷等の急性創傷から、褥瘡、糖尿病性潰瘍、下腿潰瘍などの慢性創傷に至るまで、幅広く診療しています。この分野に関連して、当科大学院生が「慢性創傷と創感染」のテーマで基礎的研究を行っており、現在注目されているCritical colonization創の病態を解明する上でたいへん興味深いデータがでてきています。小児形成外科では外表の先天異常を扱い、口唇口蓋裂、

教室紹介
形成外科

手足の多指症・合指症、漏斗胸、母趾や血管腫などのあざを数多く治療しています。再建外科では外径〇・五mmから1mm前後の微小血管を手術用顕微鏡下に吻合するマイクロサージャリーを用いて組織移植を行い、乳房再建や頭頸部再建、四肢の再建術を積極的に行っています。この分野でも「皮弁内の血管構築」や「皮弁の微小循環」、「虚血組織の血管新生」に関するテーマで研究が行われています。抗加齢医療は今後発展が予測される分野として世界的にも注目を集めています。当科は新診療棟内に皮膚科と共同で美容医療ユニットを立ち上げる予定であり、現在もシミ・シワの治療、老人性眼瞼下垂の手術などを積極的に取り組んでいます。

福岡大学病院形成外科の今後の課題として、一、研究環境の整備、二、診療施設の拡充、三、医学部学生教育、四、卒後研修医・医師教育

(文責、木下浩二)